



ASHA

特定非営利活動法人

アーシヤ

アジアの農民と歩む会

会報  
69号



U. K. 州の山岳地帯の子どもたち。来年度、この地帯で事業を開始する予定。



## 世界中の子どもたちの 未来に、平和と平安を祈る

アーシヤ代表理事 三浦 孝子

「より持続可能に  
より女性の参加を  
より子どもたちに教育と希望を」

アーシヤ＝アジアの農民と歩む会のモットーです。

世界平和を、誰もが願っているはずなのに、今日も戦争や内紛が続いています。

医学の進歩により、恐れるほどの感染症とは無縁と思われた21世紀に、パンデミックなコロナ感染症との付き合いは、未だ先が見えない状態が続いています。

気候の変動による自然災害、これからも、いつどこでも起こりうると普段からの備えが必要です。

どこの国に生まれても、どこで育っていても、子どもたちが、安全な食べ物、飲み水、住む場所が得られ、安心して教育を受けることができますようにと、希望をもって未来に向かって進んでほしいと願っています。

アーシヤ＝アジアの農民と歩む会は創設から18年、インドを中心に活動を続けてまいりましたが、ここ数年は、今までで、最も厳しい状況が続いております。それは、アーシヤだけではなく、すべてのNPO、国内外の社会活動そのものが、人の往来、集いの制限はじめ、経済活動も制限しないと言われても、先行きが見えず、みんなが不安を抱えてしまう現象が起こっているからです。このような時に思い出す言葉があります。

「暗いと不平を言うよりも自ら進んで明かりを灯しなさい。

だれかがやるだろうということは、だれもやらないということを知りなさい。」

マザーテレサが愛され、よく使われたという聖パウロの言葉です。

アーシヤとは、ヒンディー語で希望という意味です。このような時代にあつてこそ、希望の明かりを灯すことが、アーシヤの使命ではないかと考えています。

現在、毎週のように、アーシヤの活動を笑顔で伝える活動を継続しています。笑顔子どもたちとまた、大人たちと、共有できるように働きたいと願っています。



## 持続可能な農業の普及：有機農業と加工・販売を農村住民の手で



### アーシャの更なる挑戦

～北インド山岳地帯における  
有機農業と加工・販売～

事業統括責任者・三浦 照男

新しい活動対象地域は標高千から2千メートルのヒマラヤ山脈に近い山岳地帯、住民の多くはインドアリア系言語の一つ、ガロワリー語を話します。マキノスクールが過去18年間培ってきた持続可能な農業の技術や考え方の普及と農村女性が作った農産物を農村女性の手によって加工、販売するプロジェクトを立ち上げようと現在奮闘しています。

**農業と観光の地：**北インドの西寄りにあるウッタラカンド州テリーガロワリ県。同州の人口は東京とほぼ同じで1100万人。アーシャが活動するウツタルプラデシュ州は約2億ですから、かなり小さな州です。主な産業は農業と観光。高地であることから、灼熱を避けてインド各地から避暑のために人々が訪れます。更にヒンドゥーの聖地が点在することもあり、観光の名所ムスリー地域には多くのホテル、ゲストハウスが立ち並んでいます。また、インターナショナルスクールが多く、外国人も多く居住する地域でもあり、同地区の都市部は近代化が急激に進んでいます。

**伝統的な農業と村外への流出：**しかしながら、農業を主な生業としている山岳地帯の農村部は未だに伝統的生活を堅持しているのです。農村住民にとって、直ぐそこまで近代化の波が押し寄せ、都市と農村部の社会経済格差、森の消失等を伴った生活環境の変化など厳しい状況に置かれています。人口増加により一戸当たりの耕作面積が減少し、それに伴って農業だけでは生計が立たなくなっているのです。更に追い打ちをかけえるように子どもの教育、自動二輪、テレビやスマホの購入費や維持費等で現金収入への執着心が強くなっているようです。これを裏付けるように多くの農村男性は都市部への移住や出稼ぎを選択するのです。先般、この地域を訪問し女性10名のグループの集会に出席した時に質問しました。「現金収入はどうしていますか?」「夫が稼いでもってくるよ」。「どこで働いているんだい?」4名が都市部へ（州都、デリー、ムンバイ）。そして1名が村

で小売店経営、残る1名は老齢のため家で農業をしているとのことでした。残り4名の夫は海外への出稼ぎでお金を送金しているとのこと。ドバイ、マレーシア、シンガポール、ロシアへと。1～2年に一度しか帰国できないとのこと。

**農村女性が農村を担う：**この訪問で分かったことは農村の農業労働は主に女性とその子どもが担っていて、若い有能な若者は都市部又は海外へ流出、留守番役は主に女性であるということです。農業をしているのは女性と引退した高齢者なのです。しかし、今後、女性の高等教育がより一般化すれば日本の山岳地帯で見られるような限界集落が増えてくる可能性が十分にありそうです。どのようにこの地域の活性化を図るか、素晴らしいヒマラヤ山脈が眺められるこの地帯で誇りが持てる農村生活改善活動ができるか、これらが私たちの挑戦です。持続可能な農業をする農村住民がいて山岳地帯は守られるのです。

### 女性農村住民のリーダーの育成がカギ

アーシャの持続可能な農業普及は北インドの広大な平野で行われてきました。試行錯誤の中でアラハバード有機農業組合は現在も栽培普及、加工、販売を地元の農村出身者を中心に行っています。その経験を活かし、標高千メートル以上の山岳地帯で女性を中心とした持続可能な農業普及、加工、販売を行うことがアーシャの新たな挑戦です。この普及活動を通して農村女性が村の改善、発展のための活動に参加するのです。また村の発展に寄与しているという誇りと自信を彼女たち自身が感じることもなのです。先述したように山岳地帯の農村女性は他の文化や交流を持つ機会はほとんどありません。ですから単に野菜作物の栽培のみならず彼女たちが作った農作物を彼女らの仲間が加工し、販売する。これは彼女たちにとっても大きな挑戦です。この活動参加によって農村女性の人材育成、ネットワークが広まると期待しています。これは彼女たちの誇りとなり、農村部の貴重な人的財産となると考えるのです。

**ARI卒業生が関わるNGOとの協働事業：**この事業はアジア学院の卒業生・スレンダーシン氏が事業責任者として同地区で過去20年近く活動しているムスリー農村開発協会との協働で来年度より実施予定です。



## Makino School 持続可能な農業と開発コース(SCSAD)の卒業生は今



### 23歳の農業と関わる思い

アーシャ理事 青野 勇  
SCSAD 2017年卒

今日の日本の農業の世界はどんな世界でしょうか。農業というものは、稲作や野菜などの耕種分野と酪農や養鶏などの畜産分野、大きな目で見れば林業や加工業も含まれることもあります。このような動植物と共に生き、生産物をいただき、分け合って生活をしていくことが農業です。農業形態は様々ですが、どんな農業形態でも多岐にわたる作業内容があり、近年、問題となっている地球温暖化や戦争に直接大きく影響を受けます。農業は人間に絶対不可欠な食を支える最も大事な職業であると思います。



愛農高校(三重県)の野菜部で生徒と一緒に、年間約60種類の野菜を栽培・加工する筆者

しかし、日本の自給率はカロリーベースで40%を切っており、さらに農業の世界も高齢化がかなり進んでいます。日本の農業に日本を支える未来はあるかと聞かれたら、正直なところ難しい。これが僕の率直な意見です。日本は今でさえ大半は海外に頼っています。じゃあどうするか、この時代に生まれて、これからの時代を生きていく僕たち、またこの文書を読んでいるあなた。あなたはこれからどう生きますか？他人事にして生活をする方が楽し、自分のことで精一杯でそこまで考える余裕がないのかもしれない。でも、このままで僕たちは僕たちの子供は生きていけるのでしょうか。人間の弱い部分を直視して、批判してもどうしようもない。それを理解したうえで僕たちは支え合って生きていきたいものです。

農業後継者は必ず必要です。しかし、ただ簡単に一括りにまとめてしまっているのは、向き合っていないと思います。

す。人にはそれぞれ生きてきた過去と知識、生きている現実と考え、これから生きたい夢や思いがあります。その人、その人色々な気持ちがあるので、そこを大切にしていける必要があると思います。また、農業というものの重要性や食について考える機会などが今の時代に足りていないと思います。

なんて固いことをいっても興味を持つ人はなかなかいないです。この間、種をまいたところから芽が出た。その芽が大きく成長して大きなトマトが採れた。鶏を飼い始めて、その鶏が初めて卵を産んだ。その卵を卵焼きにしてお弁当に詰めてお昼に食べた。庭にあったブルーベリーの木からブルーベリーがなっていた。隠れて一人でつまみ食いをした。スーパーで冷凍食品の餃子を買うのではなく、自分でニラを切りひき肉と混ぜて、皮に包んで焼いてみんなで食べる。こんな小さなことが楽しくて意外と心に残ると僕は思っています。しかし、今の日本でこのような体験を出来る人はどのくらいいるのでしょうか。

小さな積み重ね、地味で目立たなくて、ゆっくりな時間の中にいる心の余裕と現実を確保すること、まずそこから始まるのではないのでしょうか。農業後継者を育てるというより、どんな人でも気軽に庭に種をまいて野菜を育てたり、鶏を飼ったりできるようになればいいのかと思います。インドでもそうだと思うのですが、自分の食を自分の手で作れるのは、生きる糧を生産できることは大きな力となります。そこにちょっとプラスで隣人のために野菜を育てるそのことが農業ではないのでしょうか。



SCSAD 卒業生： 近藤響宇2015年卒(左)  
岡言紀 2015年卒(中央奥)、筆者2017年卒(右端)



## 私の目から見た インドでのアーシャの活動

守田 道子

インド事務局長が不在であった7月から8月までマキノスクールの事務とAVSの仕事を手助けしてくれました。英語・ヒンディー語が堪能な方で、大変助かりました。心より感謝いたします。

初めまして、守田と申します。2022年の北インドの雨季を、ASHAがご支援くださっているマキノスクールで過ごさせていただくことになりました。

ASHAとのご縁は、私が10年ほど前にインドのリシケシという場所で、和食カフェを開いたときに始まりました。和食というからには、お味噌、お醤油は必須です。ASHAの活動の一翼であるAOACの製品、お味噌とお醤油が、私とASHAの出会いの窓口でした。お陰様でカフェは10年ほど続き、その間に多くの方々を訪れてくださいました。「体が弱っていた時に本物の味のお味噌汁が飲んで、救われた」と言ってくくださった方もいらっしゃいます。インド中でAOACの商品を購入している方々は、少なからず同じように思っているに違いありません。ASHAから始まったAOACの活動は、インド中にご縁のある方々の、体と心の健康をサポートしているのです。

また会報を拝見するようになって、ASHAの活動がAOACだけではないことを知りました。コロナ前まで活発に行われていた各国からの農村指導者育成事業は、実習を基盤にした実のある学び。会報で知る限りですが、様々なバックグラウンドの若者たちは、コミュニティをより良くする智慧と自信を持って巣立って行きました。そしてASHA学校での、政府の公立学校では受けられないような全人教育。母子保健の視点からの、生活改善指導と、日々の食の栄養と健康。農村女性の裁縫技術習得による自立支援。昨今は経済成長の著しいインドですが、そこにはユガミもヒズミも生じます。経済的に取り残される人々が国内で受けられる教育より、よりよい世界を見ることのできる可能性を提供されているASHAの支援プログラムは、インドそして関わる人々の未来を、草の根から担っていると思います。

リシケシでは仕事柄、旅行者と接することが多い日々でした。インドを旅することは、価値観が変わるような経験の連続です。刺激的な目くるめく非日常のそれは、し



事務の仕事をこなす守田さん。

かし永続的ではありません。マキノスクールにいて、インドにいながらも、日々がつながり過ぎて行くことの大切さ、感謝の気持ちがふつふつとわいてくるスタッフたちの笑顔。大きな家族の中にあるような気持ちになるのです。変化は内側からやってきます。変化というより、懐かしさをおぼえる気づき。それはアーシャの標榜でもあるSustainableでHolisticなアプローチを、個の視点から考え/感じるために大切なものです。旅の後、カラフルだった思い出が落ち着いて、自身の豊かな経験になり、改めて日常に戻ったときに気づく、心の支えとなるような人として大切なことが、ここにはあります。「愛」です。

愛があるからこそ、インドという土地で、こんなにも長く活動が続けてこられたのだと思います。インドの農村、働くスタッフたち、お客様。家族。ご縁ある方々を大きく包み込み前進させるASHAの愛が、もっともっと、多くの人々に届くことを願ってやみません。



AVS (裁縫事業) の農村女性たちと製品の仕上げチェックをする筆者(左端から2人目)



## インドの農村女性の育成 ～難しさの中に希望を～

インド事務局長 川口 景子

北インドの農村女性の社会的地位向上を目標に、本会は農村女性を組織化し、能力技術を身につけて自立することを目指して長年活動してきました。しかし、様々な要因によって阻まれることが毎日のようにあります。今回は、縫製技術を身につけ仕事をしている農村女性の状況を通して、一緒に考えていきたいと思えます。

### 農村女性の置かれる状況

今年度、縫製団体AVSSのインターン縫製員として働いているリータには、2人の子どもがいます。夫は飲酒をするとリータに暴力をふるうため、子どもを連れて実家に戻りました。実家も裕福ではないため、自分の手で子どもを養わなければなりません。そこで本会の支援する縫製教室に参加し、今年度からインターンとしてある程度の収入を稼げるようになりました。今では、夫が彼女の实家まで来て、帰るように説得することがあるそうですが、「絶対飲まない」と誓うまで帰らないと宣言したそうです。上記は農村女性が自分でスキルを身につけることによって、自分を苦しめる環境に依存せず自立し、夫が自己反省することを促したよい例です。

しかし、彼女たちの前にはとめどなく困難がやってきます。例えば、縫製員としてめきめき上達してきているカヴィタは、夫が病気がちで、看病のために仕事を休むことが多くあります。また、2年目のアルティは、出稼ぎから帰ってきた夫が外出を許さないため、夫が家にいるときは出勤できません。シニア縫製員のプージャは、持病を持っている母親の看病でやはり休みがちになることがあります。貧困層の家庭ではカースト蔑視や肉体労働によるストレスから、夫がお酒やドラッグにおぼれ、家族に暴力をふるうケースが多く見受けられます。文化習慣はすぐには変わらず、肉体労働も社会に必要とされています。道路や飲料水等のインフラが乏しく、肉体労働が多いと怪我や病気も多くなります。女性たちはそういう環境にあって、家族の世話を全面的に引き受けているのです。

### 農村人材育成とビジネスの両立のジレンマ

農村女性への教育的配慮をしながら、縫製事業で運営を継続させることの両立は常にこのような困難との闘いで

す。困難に直面しながら運営していると、私たちスタッフ自身が当たり障りのない運営に囚われて、踏み出してメンバーの抱える問題や成長に目を向けていないことに気づかされ、反省することがあります。ビジネスとして成立させるならば、すでにスキルのある勤務地近くの女性を雇用して、一番リスクの少ない方法で運営するのが近道です。しかしそこで、事業の目的や目標に常に立ち返らなければなりません。「私たちは何のためにこの仕事をしているか?」と。

### いい循環を生み出すために必要なこと

そのような困難な環境にいる農村の女性ですから、常に考えていることは家庭のことです。殆ど村の外に出たことがなく、組織の中で働いた経験を持たない農村女性は「よい縫製品を作って販売する」という目標のために一つになることも、容易ではありません。自分を守ることと精いっぱい、自分の行動とその結果に責任をとること、評価されることから逃げてしまう傾向にあります。しかし、それでは成長し、自立に向かうことができません。そこで、縫製能力を伸ばして、良い商品をつくるには、問題点や改善点を一緒に考えること、実行してみ、一緒に評価すること、またお客様の声をフィードバックして、感謝の気持ちも伝えること。こういった一つ一つの日々の積み重ねで、自信を持つようになり、仕事が楽しいと思えるようになってきます。そして収入を手にする事で、社会的地位も向上します。やりがいを持つと、心のこもった良い縫製品づくりができるようになり、他の農村女性の模範となり、良い循環を作り出すことができます。このような循環を生み出すには価値あるものを生み出すことや、常に向上心をキープすることが必要で、苦戦の連続です。しかし、こういった取り組みに対し、賛同してくださる方たちが少しずつ増え、一緒に商品開発に取り組んでくださっています。そうした協力の輪の中でこの活動は成り立っており、その輪をつくるのが、この世界で生きづらさを抱えている人と共に生きることだと思えます。



東京でセレクトショップ&カフェ「三叉灯」を営む三俣さんご夫妻と代表理事。栃木の本部事務所まで商品開発の打ち合わせのためにお越しくださいました。お礼申し上げます。

## 2022年度通常総会の報告

2022年度通常総会は、6月4日(土)14時30分から那須塩原市健康長寿センターのボランティアルームにて開催されました。先が見通せないコロナ禍、会場での開催は危ぶまれましたが、公共施設が確保できましたので、会場参加とWEB会議を利用した参加を組み合わせました。感染防止を徹底して三浦孝子代表理事、三浦照男副代表理事、佐藤耕士副代表理事、大浦智子理事、村上和子理事、正会員7名、賛助会員2名、支援者1名が会場に参加されました。さらに、及川洋征理事、奥村昌子理事、青野勇理事、正会員1名、賛助会員1名がWEB会議を利用して参加されました。また、正会員15名より委任状が提出されました。コロナ感染拡大の影響を受けて3年ぶりの一時帰国となった川口景子インド事務局長は、帰国時、宿泊施設で待機が求められましたが、陰性が確認され、無事に会場で参加することができました。

通常総会に先立ち、同日13時から理事会が開催されました。三浦孝子代表理事が議長となり、理事会の開会を宣言し、議事に入りました。各議案の審議が行われて、2021年度(第18期)事業報告(案)および決算報告(案)、2022年度(第19期)事業計画(案)および活動予算(案)は承認され、通常総会へ上程されました。また、就業規程変更(案)、海外拠点における就業規程変更(案)、ハラスメント防止に関する規程(案)は承認されました。

14時30分、三浦孝子代表理事が通常総会の開会を宣言し、議長の佐藤耕士副代表理事が議事を開始しました。プロジェクト統括責任者の三浦照男副代表理事から2021年度(第18期)事業報告(案)が説明されました。コロナ感染拡大の大きな波が5月と1月にあり、活動延期を余儀なくされたが、事業目標や活動内容を大きく変更することなく遂行できた。外務省、民間助成団体の資金等を活用し、豆腐の製造・販売、モリンガ栽培と加工、手工芸品の縫製を通して、農村女性の人材育成、収入向上の活動が行われた。また、農民団体やNGOに交流研修の機会を与えることができたことが報告されました。



次に、2022年度(第19期)事業計画(案)では、小規模農民の女性リーダー育成を軸に、ウツラルプラデシュ州のモリンガの栽培・加工、手工芸品の縫製の支援を継続しながら、JICAの資金を活用してウツラカンド州で現地



会場で、WEB会議を利用して、ご参加いただきました。

NGOと協働で大豆栽培普及による農村女性の組織強化、所得創出の活動を行う。インターンシップ研修は3月に計画し、海外の農業人材の日本受入研修について農業関係者と議論することが説明されました。

2021年度(第18期)事業報告(案)および決算報告(案)、2022年度(第19期)事業計画(案)および活動予算(案)の審議が行われ、満場一致で承認されました。

また、2022年4月よりパワハラ防止の義務化の全面施行を受けて、就業規程および海外拠点における就業規程にハラスメント防止の条文を追加し、詳細はハラスメント防止に関する規程に定めて、具体的な対応はハラスメントの防止及び相談対応マニュアルにまとめたことが報告されました。国内外で継続して取り組んでまいります。最後に、三浦孝子代表理事から会員活動の活性化について発言がありました。広報・販売活動の促進により当会に関心を持つ方は増えているが、そこから会員の獲得に繋がることは少ない。効果的に会員数を増やす活動について継続して意見交換を行いたいと提案されました。会員の皆様には、お知り合いの方に当会の活動をご紹介いただくなど、ご協力・ご支援をお願い申し上げます。

16時15分、全ての議事を終了して、通常総会の閉会が宣言されました。承認された2021年度(第18期)事業報告書と活動計算書・貸借対照表、2022年度(第19期)事業計画書はホームページのアーシャとは/事業報告書のページに掲載されました。

通常総会后、三浦宅で懇親会が開かれました。3年ぶりの懇親会に、有志の皆様が参加され、楽しく歓談して、交流することができました。





## 写真で見るアーシャの活動

2022年4～8月



4月、デリー日本人会ボランティアサークル様から団体訪問を受け入れ、農作業や刺繍体験、農村見学、アーシャ学校生徒との交流、市街地観光をご案内しました。



4～5月、50度の酷暑が続く中、農場でよく繁ったモリンガ葉を収穫しました。切り株からは若い芽がぐんぐん伸びました。



4～5月、農村保健ボランティアが中心となり、良く繁ったモリンガ葉を収穫し、パウダー加工を行いました。



4～5月、大学の農学部の学生とAVSのコロナポトトを開発、1000枚以上作製し販売しました。



左記の農学部の学生がデザインした大学ロゴ入りバッグ。



6月に栃木県那須塩原市でのマルシェに出店。毎月、那須町、大田原市でもマルシェやカフェでの展示販売を継続しています。



5～7月、アーシャと那須高原のフィンランドの森、岐阜県の専門家とのつながりの中で、ヨガパンツの開発が行われました。



6月、雨季が始まる前に農場では農村普及ボランティアによる大豆や野菜の苗のための土づくりが行われました。



6月に到着した佐竹楽太郎さん（ボランティア）が7月に種籾の選抜に参加しました。



8月、農場にて日本米の田植えの補植作業をスタッフ、ボランティア総出で行いました。



8月、鴨稲同時作のための鴨の雛が到着、田んぼに放すためのトレーニングを農家と行いました。

今年度の活動は、アジア生協基金より「北インド農村女性の自立のための手工芸品 マーケティングシステムの確立と生産・技術能力向上事業」のための助成金、補助金、会費、寄付、物品販売の売上などから事業が運営されています。

# アーシャ事務局便り

※ あなたの想いを世界へ、あなたの寄付でアーシャの活動を支援してください



## モリンガパウダーの販売促進

モリンガパウダーは、ビタミン類、ミネラル類、食物繊維、必須アミノ酸、GABA・ポリフェノール・β-カロテンなど 92種類の栄養成分や機能性成分をバランスよく含むスーパーフードです。原産地の北インドの有機農場で栽培したモリンガの葉のみで製造した特選モリンガパウダーを輸入し、栄養補助食品としてお届けして、毎日の適量摂取をお勧めしています。国内事務所では日本商工会議所より補助金を受け、モリンガパウダーの小分け作業の専用機械を導入し、作業効率と品質を高めました。



ホームページの「フェアトレード・モリンガパウダー」ページに、北インドの貧しい村々の農村女性によるモリンガ栽培、モリンガ粉末の製造、モリンガパウダーのお召し上がり方を紹介しています。商品を購入して農村女性をご支援ください。



## とちぎグローバルセミナー 2022

とちぎ国際交流センター(宇都宮)では「世界を感じる」16のセミナーが開催されており、当会は、7月23日(土)に「もっと知ろう! 49℃ 灼熱の北インドのこと」と題してセミナーを開催しました。講師は三浦孝子代表理事。参加者は、北インドの現地拠点をオンラインで訪問し、三浦照男現地統括責任者、農村開発やフェアトレード商品生産に参加する現地スタッフの生の声を聴いていただきました。参加者の「灼熱の日々をどう暮らしていますか?」の質問に、「朝早く起きて農作業を行い、日中は部屋で扇風機を使って過ごします。」と回答がありました。また、会場では、冷やしモリンガ茶の作り方を紹介し、試飲していただきました。また、インド発祥の笑いヨガを紹介し、withコロナのサイレント笑いヨガを体験していただきました。「モリンガと笑いヨガの最強コンビで、免疫力をアップ!」を実感していただきました。



## 事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。2022.3.26~2022.8.15 順不同、敬称略

誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡下さい。よろしくお願いいたします。

- 個人正会員 【岩手県】澤谷常清【山形県】三浦恒祺【栃木県】飯沼一浩、飯沼淳子、今野善郎、大浦宏勝【栃木県】菊地創、後藤正昭、田村修也、辻野留奈、長嶋清【長野県】青野勝、山中一耕【東京都】及川洋征【岐阜県】榎本進【三重県】中西泉【福井県】松田宗一【兵庫県】藤岡秀英
- 終身個人正会員 【栃木県】大浦智子【三重県】青野勇
- 個人賛助会員 【栃木県】池田桂子、梅田歩、漆原雅子、田仲順子、丹羽寿美【東京都】米山敏裕、北澤麻子【神奈川県】佐竹樂太郎【長野県】山中薫【愛知県】堀内泰貴【島根県】加藤輝喜
- 団体賛助会員 【栃木県】那須塩原教会
- 一般寄付 【栃木県】朝比奈宏、飯沼一浩、飯沼淳子、丹羽寿美【三重】青野勇【インド】杉野健治、デリー日本人会ボランティアグループ
- 指定寄付 【東京都】日本キリスト教団全国教会婦人会連合

- 会費 個人正会員 5,000円 団体正会員 20,000円 終身個人正会員 50,000円 終身団体正会員 100,000円  
個人賛助会員 3,000円 団体賛助会員 10,000円 終身個人賛助会員 30,000円 終身団体賛助会員 50,000円

■郵便振替 加入者名: アーシャ=アジアの農民と歩む会 口座番号: 00160-0-315147

マキノスクールは、インド、ウッタル・プラデッシュ州プラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・寄付ご支援、日本政府の無償資金協力や国内の助成財団からの助成金のほかに、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 アーシャ=アジアの農民と歩む会 ☆この会報は日本で製作・印刷しています☆

<事務局・交流センター> 〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17 TEL: 0287-47-7840 FAX: 0287-47-7841

事務局 朝比奈宏、丹羽寿美 E-MAIL: info.jp@ashaasia.org ホームページ: http://www.ashaasia.org